重要文化財　本殿

鹿島神宮
参拝のしおり

交通機関案内

東京方面より　東京駅八重洲南口より高速バス「鹿島神宮駅」行
約二時間「鹿島神宮」下車徒歩五分

千葉方面より　ＪＲ鹿島線「鹿島神宮駅」下車徒歩十分

水戸方面より　鹿島臨海鉄道大洗鹿島線「鹿島神宮駅」下車徒歩十分

高速道路　東関東自動車道「潮来インター」より十五分

一般道路　水戸より国道五一号　約一時間十分
銚子より国道一二四号約五十分
佐原より国道五一号　約三十分

香取神宮へは　東関東自動車道「佐原香取インター」より五分
鹿島神宮より約三十分

鹿島神宮社務所　〒三一四―〇〇三一　茨城県鹿嶋市宮中二三〇六―一
電話〇二九九―八二―一二〇九
ＦＡＸ〇二九九―八二―一六二五
ホームページアドレス　http://kashimajingu.jp/
メールアドレス　info@kashimajingu.jp

鹿島神宮の主な祭典と行事

一月	一日	午前六時	歳旦祭
一月	三日	午前十時	元始祭
一月	七日	午後六時	白馬祭
大寒付近の日曜		午前十時	大寒禊
二月	節分	午後三時・六時	節分祭
二月	十一日	午前十時	紀元祭
二月	十七日	午前十時	祈年祭
二月二十三日		午前十時	天長祭
三月	九日	午前十時	祭頭祭
三月九日が土日の場合は当日、平日の場合は次の土曜日に実施		日中	祭頭囃
		午後六時	春季祭
春分		午前十時	春分祭
四月二十九日		午前九時	弓道大会
		午前十時	昭和祭
五月	一日	午後一時	御田植祭・流鏑馬神事
	五日	午前十時	子供の日祭
第一日曜		午後一時	鹿島神宮吟詠剣詩舞奉納大会
六月第二日曜		午前十時	古武道大会
		午後一時	小笠原流百々手式
		午後二時	小堀遠州流献茶式
六月	三十日	午後三時	夏越の大祓式
旧暦六月晦日		午後四時	夏越祓
九月	一日	午前十時	例祭
		午後四時半	提灯まち
		午後八時	神幸祭
九月	二日	午前十時	行宮祭
		午後三時	還幸祭
九月	秋分	午前九時	秋分祭
		午前十時	祖霊社大祭（前日午後6時
			祖霊社合祀祭）
十月第一日曜		午前九時	日本古武道交流演武大会
十月	十七日	午前十時	神嘗奉祝祭
十一月	三日	午前九時	明治祭
		午前十時	相撲祭
第二日曜		午後一時	小笠原流城北支部大的式
十一月二十三日		午前十時	新嘗祭
十二月	一日	午前十一時	すす祓い
十二月	二十日	午前十時	宮贄祭
十二月三十一日		午後三時	大祓式・除夜祭
毎月	一日	午前十時	月次祭おついたち参り（一月・九月を除く）

白馬祭

「年の初めに白馬を見れば年中の邪気を祓う」という故事に基づくこの神事は、俗に鹿島大神の「お目覚めの神事」とも呼ばれ、宮中の年頭行事「白馬節会」に倣って、鎌倉幕府の四代将軍、藤原頼経によって始められました。

当日は社殿での神事に引続き、召し立てられた御神馬は太鼓と笏拍子の音色に合せて御神前を疾走します。

近年では御神馬が踏んだ小石やハンカチを持つと願い事や恋愛が成就するとの言伝えが広まり、持ち寄ったハンカチを石畳や玉砂利の上に敷く参拝者が多く見受けられます。

祭頭祭

三月に行われる祭頭祭は、神宮を境とした南北六十六郷(現在は北郷二十四、南郷二十六)の内から卜定された二郷によって奉仕される鹿島神宮固有の祭りです。

祭頭囃では、五歳位の新発意をそれぞれ先頭に立て、色鮮やかな祭衣をまとった一団十五、六名が十組ほどずつで、六尺の樫の棒を組んではほぐしながら神前へと進みます。

御船祭

御船祭は十二年に一度、午年に執り行われます。

その歴史は凡そ千七百年前、応神天皇の御代に祭典化されたと伝えられ、戦国の動乱によって中断されるまで「我が朝第一の祭礼」と喧伝されていました。

今の御船祭は明治三年に再興されたもので、御分霊をお遷しした神輿に二千名が供奉して北浦湖岸の大船津まで行き、そこから色鮮やかな五色の吹き流しや龍頭を飾りつけた「御座船」に神輿を安んじ、幟旗や大漁旗に飾り付けた船団の供奉を従えて約十一キロを佐原に向かって進み香取神宮のお迎えを受けます。

この湖上で繰り広げられる一大絵巻は、鹿島、香取両神宮の御鎮座の由緒と人々の東国開拓の足跡を伝える壮麗なお祭りとして今に伝えられています。

重要文化財
◀「奥宮」
慶長十年(一六〇五)将軍徳川家康公が本殿として奉納されたものを元和の造営の際に引き移したものです。

▲重要文化財
「楼門」
寛永11年(1634)水戸藩初代藩主徳川頼房公の奉納。この楼門の秀麗な造りは、九州の阿蘇神社、筥崎宮とともに日本三大楼門に数えられています。

重要文化財▶
「梅竹蒔絵鞍」
源頼朝が建久2年(1191)に奉納した神馬に付けられていた鞍で戦乱が起こらぬよう祈願を籠めて奉納したと「吾妻鏡」に見えております。

御祭神

武甕槌大神(たけみかづちのおおかみ)

鎮座地

茨城県鹿嶋市宮中(常陸国鹿島郡)

水郷筑波国定公園に含まれる鹿島台地は怒涛逆巻く鹿島灘を東に配し、西は水煙茫々と広がる北浦、霞ヶ浦や水郷地帯を望むことが出来ます。この台地の千古の森に有史以来の歳月を重ねて大神は鎮まられます。

社格

勅祭社　旧官幣大社(現別表神社)
常陸国一の宮　全国の鹿島神社の総本宮

御事歴

神代の昔、天照大御神の命を受けた武甕槌大神は香取の経津主大神(ふつぬしのおおかみ)とともに出雲国に向かわれ国譲りを成就し、皇孫(すめみま)の国たるべき日本の建国と建設に挺身されました。とりわけ東国における神功はきわめて大きく、関東開拓の礎は遠く大神にさかのぼります。

後に神武天皇はその御東征なかばにおいて思わぬ窮地に陥られましたが、大神の「神霊剣(ふつのみたまのつるぎ)の神威により救われました。この神恩に感謝された天皇は御自らの御即位の年、大神を鹿島の地に勅祭されました。

皇紀元年、即ち紀元前六六〇年の頃といわれてます。

重要文化財　本殿、石の間、幣殿、拝殿、仮殿

当神宮の社殿はその昔伊勢の神宮のように二十年ごとに造営が行われていましたが、現在の社殿は元和五年(一六一九)二代将軍徳川秀忠公により奉納されました。

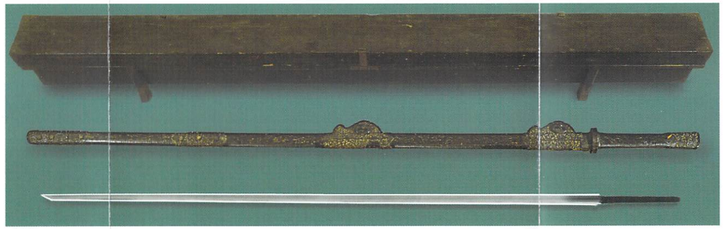
天然記念物　鹿島神宮樹叢(茨城県指定)

七十ヘクタール、二十一万坪の樹叢は照葉樹林の北限、フウランなどの北限をなし、八百種を超える植物の宝庫であり、奥参道はまさに神の森と言える荘厳な雰囲気です。

鹿島神宮略年表

年号	事項
神武天皇元年	社殿を造立する（社例伝記）
崇神天皇御代	神示により天皇は中臣神聞勝命に命じて大刀、鉄の弓、鉄の箭、許呂枚鉄、練鉄、馬、鞍、八咫鏡、五色の絶を神の宮に納め奉らしめた（常陸国風土記）
倭武天皇御代	大神中臣狭山命に宜り給うにより新たに舟三隻を造り献る（常陸国風土記）
神功皇后御代（一〇〇～二六九）	三韓征伐に鹿島の大神が守護し給ひしことにより報賽として皇后御腹帯を奉納これより安産の信仰起こる（鹿島長歴）
天智天皇御代（六六二～六七二）	造営に初めて使人を派遣これより修理絶えず年別の七月舟を造る（常陸国風土記）
大化五年（六四九）	中臣鎌子、中臣部兎子等総領高向の大夫に請いて下総及那珂国を割きて神の郡を置く（常陸国風土記）
大宝元年（七〇一）	詔して神宮及仮殿を造る又造営の年期を定めて二十年とす（当神宮式年御造営のはじめ）（鹿島長歴）
慶雲元年（七〇四）	常陸国司猛女朝臣大て鎌治佐備大麻呂等を率いて鹿島に来り神山の砂鉄を採りて剣を造る（現国宝「直刀」の制作年代と同年代である）（常陸国風土記）
神護景雲二年（七六八）	御分霊を奈良に奉遷し春日社を造立す（帝王編年記）
延長五年（九二七）	鹿島神宮、名神大社、祈年祭に官幣案上の奉幣、月次祭、新嘗祭に預る（延喜式）
建久二年	源頼朝神馬同鞍奉納（古文書）
仁治二年（一二四一）	当神宮炎上、但し本殿奥御殿は焼かず
慶長十年（一六〇五）	御造営、徳川家康関ヶ原の戦勝報賽に奉納（現奥宮社殿是なり）（古文書）
元和五年（一六一九）	御造営、徳川二代将軍秀忠奉納により現在の本殿、石の間、幣殿、拝殿の造営成る。同時に僅か十四年前奉納の本殿を引き奥宮社殿とす（古文書）
寛永十一年（一六三四）	楼門廻廊忌垣百三十間造営、水戸藩主徳川頼房奉納（古文書）
明治四年	官幣大社に列せられる
明治四十三年	御本殿大修理
大正十二年	拝殿大修理
昭和四年	天皇陛下行幸
昭和二十九年	式年大祭勅使参向、奥宮社殿大修理
昭和四十一年	常陸宮同妃両殿下御参拝
昭和四十五年	皇太子殿下御参拝
昭和四十五年	本殿以下四棟塗替工事完成
昭和四十九年	天皇皇后両陛下行幸啓
平成四年	天皇皇后両陛下行幸啓
平成二十六年	祈祷殿、参集殿、社務所を備えた庁舎竣工
令和元年	授与所竣工

※史実については当時の称号で表記



▲国宝
「直刀」金銅黒漆塗平文拵附刀唐櫃
日本最古最大の直刀で、制作年代は今から約1300年前と推定されます。常陸国風土記に、慶雲元年、国司等が鹿島神宮の神山の砂鉄で剣を作ったとあり、その剣であろうともいわれております。古くは本殿内に納められていた神刀で、御祭神の神剣師霊剣(ふつのみたまのつるぎ)の名も伝えられています。

要石

要石は鹿島七不思議の一として知られ、世俗に地震を起す鯰の頭を押さえる石として知られます。古来「山の宮」「御座石」などの別名を持ち、掘っても掘りきれない石といわれます。

御手洗(みたらし)

古来神職並びに参拝者の潔斎の池。その水は美しく澄み絶えず滾々と流れ出る霊泉です。神代の昔、大神が天曲弓で穿たれたとも、宮造の折一夜にして湧出したとも伝えられ、大人子どもによらず乳を過ぎずということで七不思議に数えられています。

大昔は当神宮の参道がこの御手洗を起点としてこの池で身を清めてから参拝するので御手洗の名が今に残されています。

▶「百馬図」雪村筆
この百馬図は雪村が当宮に百日間参籠し描いた絵で、簡素な筆使いにより一層馬の動きを見事にとらえています。また、絵には一枚ごとに「奉進納鹿島大神宮」と書かれています。

一之鳥居(西)

鹿嶋市大船津三二五一沖

鹿島神宮の西の一之鳥居は北浦湖畔に立ち、参道を進むと二之鳥居に至る位置に配置されており、その昔、参拝者は舟で水上に立つ鳥居をくぐり接岸し参拝しました。陸上交通が主となった明治以降、陸上に立てられていましたが、平成二十五年、往時の繁栄を後世に伝える為水上鳥居として再建されました。

一之鳥居(西)概要

素材	耐候性鋼材
川底からの高さ	18.5メートル
幅	22.5メートル

水上鳥居としては国内最大級

大鳥居

平成二十三年三月の東日本大震災で石の大鳥居が倒壊、再建は困難が予想されましたが、氏子崇敬者の皆様の御芳志を賜り、平成二十六年六月に竣工しました。

御用材は境内の杉四本が使用され素朴で力強いその姿は境内の緑に映え、震災復興のシンボルとして親しまれています。

大鳥居概要

全高	10.272メートル	
全幅	14.665メートル	
樹齢	柱材	約500年
	笠木材	約600年
	貫材	約250年

鹿島鳥居について

鹿島神宮の鳥居を代表とする形式で、笠木は向って左側に根本の太い方を置くのが特徴です。

祈祷殿・庁舎

平成二十六年御船祭の記念事業として竣工。建物内に神殿が設けられ、大勢の方に快適な環境で御祈祷をお受けいただけます。

その他社務所参集殿を備え、外観内装とも天然木を使用して神社にふさわしい姿となっております。